

3 与えられた仕事を精一杯行う

仕事は自分や家族が生活を営む糧^{かて}を得る手段であると同時に、生活に規律を与えて自分らしさを追求する行為である。仕事を通じて自分の価値観や信念が形成されるが、社会に生きる人間としては、仕事を通じて世のため人のために尽くすことも求められる。したがって、仕事は神聖であり進歩がなければならないし、また精神的充足が得られねばならない。

仕事とは多様な意義を持っているが、経験の少ない者に初めから重い仕事が授けられるはずがない。筆者が入社して最初に命じられた仕事はコピー取りだった。適当にコピーして上司に渡したが、実はその内容を知っておけという上司のサインであったことに後日気がつく。上司は単純な仕事を命じる中で筆者を教育してくれていたのである。

渋沢栄一は、「経験の少ない若い人に、初めから重い仕事を授けるものではない。(中略) 青年はただその与えられた仕事を専念^{せん}に行^やってゆかねばならぬ。その与えられた仕事に不平を鳴らして、いってしまう人は勿論駄目だが、つまらぬ仕事だと軽蔑して、力を入れぬ人もまた駄目だ。およそどんな些細な仕事でも、それは大きな仕事の一小部分で、これが満足にできなければ、遂に結末がつかぬことになる。」(「自ら箸をとれ」『論語と算盤』)と語っている。

与えられた仕事に不平を鳴らして職場を去る人間は勿論駄目^{だめ}だが、つまらない仕事だと軽蔑して手を抜くのもまた駄目。どんな些細^{ささい}な仕事でも、それは大きな仕事の一部分であり、これが満足にできなければ最終結果を得られない。無駄な仕事は一つもないことを心しておいてほしい。

近年では就職してすぐに離職する若者が増えていることが社会問題となっている。自分のやりたいことが明確ではなかったこと、会社の業務内容や風土を事前にきちんとリサーチしていなかったこと等々がその原因だろうが、辛抱が足りなくなった若者気質もまた影響しているのではないだろうか。仕事は一朝一夕に身につくものではなく、会社はじっくりと教えて一人前に育てようとする。会社は長く働いてくれる人を求めるのであり、「石の上にも3年」という諺を噛み締めてもらいたいものである。